

聴覚障害乳幼児の絵本の興味の特徴に関する研究

-大学生・大学院生の評価を通して-

○三枝里江

(筑波大学人間総合科学研究科)

鄭仁豪

(筑波大学人間系)

KEY WORDS: 聴覚障害乳幼児 絵本 興味

1. はじめに

近年、特別支援学校（聴覚障害）や図書館等公共施設などボランティアによって手話による絵本の読み聞かせが行われている。手話による読み聞かせは乳幼児だけではなく、コミュニケーションを取りにくいとされている両親にとってもコミュニケーションの取り方を学ぶ、一つの機会であると考える。しかしながら、手話による絵本の読み聞かせに関する情報はほとんど示されておらず、十分に検討がされているとは言い難い。

ところで、子どもに人気のある絵本は子どもの好奇心や興味を刺激することが報告されており（佐々木, 1984）、子どもがどのような絵本を好むのかを調べることによって、興味の要因を推測することができる（高木, 1983）。聴覚障害乳幼児が手話による読み聞かせを通して、どのような絵本に興味を示し、どのような要素が含まれているのかを検討することで乳幼児の読み聞かせに関する基礎的な知見を提供できると考える。本研究では、手話による絵本の読み聞かせを行っている聴覚障害者に聴覚障害乳幼児が興味を示す絵本を選定してもらい、その絵本の特徴を検討することを目的とする。

2. 方法

(1) 絵本の選出：手話による読み聞かせを行っている日本手話を主なコミュニケーション手段とする聴覚障害者1名に、聴覚障害乳幼児が、興味を示す絵本を選定してもらった。

(2) 評価の対象者：大学生・大学院生 53名を対象とした。

(3) 評価の内容：高木（1983）を参考に絵本の内容、及び絵に関する15項目を作成し、5段階評価によって評価の検討を行い、絵本を読んだ経験の有無による比較検討を行った。

(4) 分析方法：①絵本に対する評価の検討においては因子分析（最尤法・バリマックス回転）を行った。②絵本を読んだ経験の有無による比較検討においてはt検定を行った。

3. 結果

(1) 絵本の選出：「だるまさんが（かがくい, 2016）」が選出された。

(2) 絵本に対する評価の検討：15項目に対して最尤法による因子分析を行った。その結果、解釈可能性から4つの因子を抽出した。4因子の累積寄与率は56.87%であった。回転前の固有値は、第1因子4.08、第2因子1.41、第3因子1.26、第4因子1.04であった。第1因子に負荷量の高い項目は「わかりやすい-わかりにくい」、「単純な-複雑な」、「動的-静的」であった。そのため、『わかりやすさ』と命名した。第1因子の尺度得点の α 係数.780であり、平均値は3.24 (SD = .574, n=53)であった。第2因子に負荷量の高い項目は、「意外な-常識的な」、「明瞭-あいまい」、「リズムがある-リズムがない」、「具体的-抽象的」であった。そのため、『対称さ』と命名した。第2因子の尺度得点の α 係数.712であり、平均値は3.85 (SD=.679, n=53)であった。第3因子に負荷量の高い項目は「親密-疎遠」、「明るい-暗い」であった。そのため、『親しみやすさ』と命名した。第3因子の尺度得点の α 係数.630であり、平均値は2.04 (SD=.346, n=53)であった。第4因子に負荷量の高い項目は、「好き-嫌い」、「おもしろい-つまらない」であった。そのため、『おもしろさ』と命名した。第4因子の尺度得点の α 係数.599であり、平均

Table 1 絵本の評価に対する因子分析の結果

因子名	α	Mean	SD	n
I. わかりやすさ	.780	3.24	.574	53
II. 対称さ	.712	3.95	.679	53
III. 親しみやすさ	.630	2.04	.346	53
IV. おもしろさ	.599	2.11	.331	53

Table 2 絵本の評価の下位尺度得点の経験の有無による比較

	全体		経験あり群		経験なし群		t値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
I. わかりやすさ	12.96	2.30	12.94	2.79	12.97	1.98	0.40
II. 対称さ	15.81	2.72	15.83	2.96	15.80	2.63	0.04
III. 親しみやすさ	8.17	1.38	8.33	1.14	8.09	1.50	0.54
IV. おもしろさ	8.43	1.32	9.00	1.14	8.14	1.33	2.33 *

* $p < .05$ (自由度51)

値は2.11 (SD=.331, n=53)であった。Table 1に絵本に対する評価の分析結果を示した。

(3) 絵本を読んだ経験の有無による検討

絵本を読んだ経験の有無による違いを検討するために、絵本の評価の下位尺度得点についてt検定を行った。その結果、「おもしろさ」下位尺度 ($t=2.33$, $df=51$, $P<.05$)において、経験あり群と経験なし群の間で有意な差が認められ、経験あり群の方が有意に高い値であった。Table 2に経験の有無による比較の分析結果を示した。

4. 考察

大学生・大学院生による絵本の評価によって、聴覚障害乳幼児はシンプルで、リズムがあり、親しみやすく、おもしろいといった要素を含む絵本に興味を示す特徴があること、絵本のおもしろさや好みは絵本を読んだ経験と関連していることが示唆された。読み聞かせの語り手によって選出された「だるまさんが」は、赤ちゃん絵本に分類され、リズム感があり、関係性を作る絵本として位置付けられている（鈴木, 2016）。このことから、聴覚障害乳幼児はリズムがある絵本に反応を示し、絵本の読み聞かせというコミュニケーションツールを通して、読み手との関係性を構築していると考えられる。今後は、読み聞かせ中のやり取りを含めた検討が必要であると考えられる。

5. 文献

かがくいひろし (2016) だるまさんが. ブロンズ新社.
 佐々木ひろ子 (1984) 幼児の心理発達と絵本. れいめい書房.
 鈴木穂波 (2016) かがくいひろし『おしくらまんじゅう』にみる「生」の表現. 岡崎女子短期大学研究紀要, 49, 31-38.
 高木和子 (1980) 物語絵本に対する興味についての実証的研究. 阪本・岡田・高木 (編). 読書興味の研究. 野間教育研究所, 179-259.
 (SAIGUSA Satoe, CHUNG Inho)